

緑のネットワーク・まつど

代 表：藤田 隆
 年会費：1000 円
 口座番号：00170-9-696174
 連絡先：高橋盛男 090-2935-9444

緑ネット通信 No.75

都市の緑を残すためには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動の目的は、みどり特に樹林の保護・保全を願う人やグループと連携しその輪を広げ、豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

拝見！ とんりの里山活動 【柏市編その2】

カシニワ制度 - 柏の街をひとつの大きなガーデンに -

緑のネットワーク・まつど 高橋 盛男

松戸の近隣市の市民ボランティアによる里山活動を訪ねるシリーズ。今回、柏市の2回目は、「カシニワ制度」を取り上げます。



空き地がカシニワで地域のコミュニティスペースに

細江まゆみ「カシニワ制度の効果に関する一考察」(2016)より

マッチングと助成による仕組みが特色

カシニワという、オープンガーデンなどでにぎわう「カシニワ・フェスタ」を思い浮かべるかもしれませんが。しかし、イベントのベースである「カシニワ制度」は、オープンスペースの保全や再生利用を目的とし、マッチングと助成を組み合わせた「カシニワ情報バンク」と「カシニワ公開」からなる仕組みです。

カシニワは「柏の庭」と「貸す庭」を掛け合わせた造語。その構想は、2009年に改訂された「柏市緑の基本計画」に記され、翌2010年に制度の運用が開始されています（第1回カシニワ・フェスタは2013年開催）。

下図にあるように市が仲介し、土地の所有者と活動団体（または個人）の間で協定を結ぶかたちは、千葉県里山条例（2003年施行）に準じたもので、松戸市も里山活動の一部に協定制度を取り入れています。

しかし、大きく異なるのは、仲介の手法として市が「カシニワ情報バンク」を設け、活動団体(企業・個人)と土地所有者を広く公募し、両者の意向のすり合わせ(マッチング)をしていること。そして、その対象が樹林地の



みならず、コミュニティガーデンや農園、広場、公共用地と幅広いことです。また、助成は活動フィールドの一般公開を申請の条件としています。

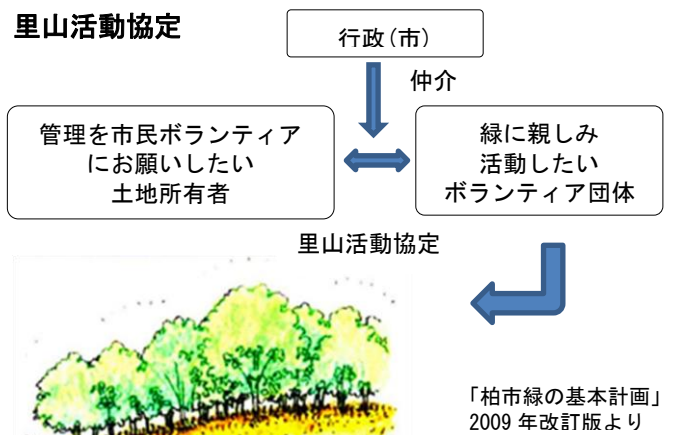
カシニワのコンセプトは、この制度で「柏の街をひとつの大きなガーデンにする」というもの。「カシニワ情報バンク」と「公開」がキーになっています。

新人職員の発想と奮闘で実現したカシニワ

カシニワ制度の誕生には、1人の若い職員が主要な役割を果たしています。細江まゆみさん（現・札幌市職員）です。彼女は民間企業に就職後「緑に関わる仕事がしたい」と千葉大学大学院園芸学研究科で学び、2008年に柏市公園緑政課（現・公園緑地課）に入りました。「緑の基本計画」改訂の時期でした。

「大学院で緑地計画を学んでいたこともあり、基本計画の改訂にかかわりたいと、積極的にアピールしていました」と細江さんは振り返ります。

里山活動協定





この緑の基本計画の中に、主要施策として「未利用地を活用した多様なコミュニティガーデンづくり」が位置付けられたことがカシニワ制度の創設につながります。この施策のアイデアは、計画策定委員長の横張先生(東京大学)との打ち合わせで生まれました。細江さんも打ち合わせに同席する中で「この施策は面白いし制度化したい」と思ったそうです。樹林地や耕作放棄地、空き地・空き家など、低利用地が全国的に増加しているなか、これを再生利用する制度をつくれなにかと細江さんは考えたのです。そして、緑の基本計画改訂後、細江さんは南條課長(当時)から指示を受け、カシニワの原案ともいえる仕組みを提案。しかし、その実現は一筋縄ではいきませんでした。

「行政職員は異動もあるので、なるべく早く制度化したいと思ったのですが、新しいことを始めるとなると、保守的な意見も多くて……」

課内に設置したプロジェクトチームの話し合いで「モデルケース 1カ所から始めてはどうか」というこ

とになりましたが、それは早く制度化したい細江さんの意に沿うものではありませんでした。関連部署からの協力も思うように得られず、制度創設の意欲はトーンダウン。カシニワ実現は一時、頓挫しかけました。

「みどりの市民力」の次は「行政力」のアップを

そのカシニワ制度が再び動きだしたのは、海保部長(当時の)「そういえば、あの制度どうなった？」という一言でした。議会答弁でカシニワ制度を進めることを部長が宣言したことから、一気に制度実現へ。「上司に恵まれた」と細江さんは言います。

後に、(一財)柏市みどりの基金に出向した細江さんは、助成金制度の創設やカシニワ・フェスタの立ち上げも担います。「目の回る忙しさ。あの時期、今までで一番働きました」と笑顔でふり返ります。

「でも、うれしかったのは、感度の高い市民がこの制度に目を向けて登録してくれたり、団体を立ち上げたりしてくれたことです。こんなにたくさん、すごい人たちが柏市にいるんだと感動したほどです」

現在、カシニワ制度の運用は、住環境再生課という新設部署に移され、新たに「カシニワ・おうち」という空き家再生利用の活動も対象になっています。登録団体・個人数は139件(樹林地19件)にのぼり、助成金も緑地の場合、対象経費の10分の8かつ上限30万円まで(団体)、ほかに資格取得等助成や緑化助成基盤整備助成もあり、松戸市より充実しています。

「隣の芝生は青い」言いますが、柏の芝生は松戸より確かに青い。「みどりの市民力」を支援し、育ててきた松戸市、次は「みどりの行政力」も高めてほしいものです。

松戸里やま応援団が 伐倒研修会で 難しい伐倒作業を支援

野口 功

松戸里やま応援団は、活動開始以来 20 年近くたって高齢化が進み、技術・経験の継承が大きな課題となっています。そのため、昨年 4 月、運営委員会を設け、いくつかの専門部会を設置しました。

一方、森では木が年々大きくなるとともに痛みも進み、特に近年の台風被害やナラ枯れの発生などにより、対処が難しい事例が増えてきました。そこで、各会の単独では処理が困難な作業について、新たに設けた技術・安全部会のもとに応援団全体の力を結集して対処することにしました。この共同作業は 1 年間で 13 回となり、うち 9 回は伐倒研修会として実施しました。

広葉樹は大きく枝が張り出して重心の判断が難しく、また木が込み合った森では隣の木に架かってしまう危険があるなどそのたびに状況が異なり、的確な判断、作業方法の選択が求められます。大木の伐倒や複雑な架かり木の処理を安全・正確に行うには、専用の機材とそれを使いこなす技も必要です。現在は個人に頼っている面がありますが伐倒研修会はそうした技術・経験を普及する機会となっています。



金ヶ作野中の森での 伐倒研修会

藤田 隆

1月21日（金）松戸市金ヶ作野中の森で伐倒研修が行われた。講師は松戸里やま応援団の野口代表や技術・安全部会のメンバーが務め、応援団有志19名が参加した。

樹高20.6m地上80cmで直径58.9cmのサワラの内部は朽ちてボロボロ。電線と隣家が迫る典型的都市の樹林地。昨年秋、急に枯れ、接する隣家は不安だったに違いなく、生活道路が通っていることから、処分が急がれた。

〈伐倒木と伐倒方向〉

野口氏は伐倒前にすべきことについて参加者に質問を投げかけた。・対象木の重心と伐倒方向の決定 ・伐倒方向の障害物の除去 ・樹高の2倍の距離での回避など、参加者から回答が返ってきた。

かかり木を避けるよう伐倒方向を決め、滑車とロープによる2倍力でチルホールを使うけん引を行うこととした。

次に対象木の枯れ具合を確認し、内部の枯れの広がりや伐倒に与える影響を考えた。次に伐倒方向にある小径木、切り株を処理した。ビッグショットでロープをかけ、動滑車をつけ2倍力でけん引した。

伐倒方向の木に設置した滑車を經由してチルホールを設置。かかり木を避けるため伐倒方向・滑車を右に移動させた。

〈受け口、追い口切り〉

チルホールでけん引し予定方向に倒れたが、広葉樹の上部の枝にかかり木となった。ロープと滑車を調整し、チルホールをけん引して引き落とした。

伐倒後、内部を見たところ、中心から直径25cmまで腐食が進んでいた。



内部はすっかり腐食していた

〈反省点〉

一連の作業を振り返り、伐倒後チェーンソーまわりには集まらないこと、チルホールのオペレーターは声が届く距離に位置することなど、反省すべき点が指摘された。

溜ノ上の森 伐倒研修会で枯損木伐倒

溜ノ上レディース 渋谷 孝子

ある日、溜ノ上の森のエノキの大木が枯れていることに気づきました。太い枝が散策路の上に張り出しており、このままにしておかず、とにかく周辺を通行禁止にしました。「さて、どうしたものか…」と頭をかかえていると「里やま応援団の伐倒講習会で伐倒してもらえるかもしれないよ」との情報があり、ご相談したところ「技術・安全部会の伐倒研修会」の予定に入れていただくことが出来ました。

12月24日応援団8名の方が早朝より重い用具を運び込み、多くの溜ノ上レディースやナイツも見守る中、作業が行われました。

枯れているので思わぬ方向へ倒れる危険があるため、まず太い張り出した枝を切り落とし、本体はロープと滑車を使ってけん引しながらの伐倒となりました。ズッシーン！という地響きが森じゅうに伝わり、見守る顔が安どの表情に変わりました。すべてが順調に、安全に、予定通り作業が進み、応援団の実力に感



伐倒方向を確認



森のサロン？

動ひとしおでした。

樹高は 18m を超え、胸高直径は 60cm。年輪は 50 ま
でカウントできました。竹林の中には切り株のテー
ブルを玉切りのスツールが囲む、ステキな空間が出来
ました。溜ノ上の森は応援団には入っていませんが、こ
んな風にお世話になり、本当に感謝の気持ちでいっば
いです。ありがとうございました。

第 1 回グリーンウッドワーク(生木の木工)体験のワークショップ

森で木工 in21 世紀の森と広場

三嶋 秀恒



2 月 12 日午後、里やま Q
主催の木工教室が縄文の森
で開催されました。講師は里
やま Q のホーリさん。会員 6
名と里やま応援団 10 名が参
加しました。

欧州の伝統的な技術と手工具を利用して、原木からの
工作です。手順①作業台で丸太割り、②削り馬・膝置き
万力で削りの実演、③15mm のオーガーと角度ガイドを
使った穴開け作業等の説明ののち、里やま Q スタッフが
事前に用意した部材で作業開始。

素朴風と製材風の 2 種類の
花台を作るのに夫々の作
業場に分れてパーツ作製。
みなさん次第に慣れてき
て、組立てて無事完成！



..... **総会のお知らせ**

例年 5 月に総会を開催しておりますが、今年度は
新型コロナ禍のため、会員が集合しての総会を見合
わせません。運営委員会で事業・会計報告、事業計画・
予算等を審議し、総会といたしますので、ご意見の
ある方は 3 月末までにご連絡ください。なお、総会
報告は次号で行います。 代表：藤田 隆

～しぜんのコラム 51～

カワウがブラックバスを鵜呑み

21 世紀の森と広場の“千駄堀池”は、遊水機能を
持たせた人工的な池。オオハクチョウやカモ類の飛
来はうれしいが、広大な水田や湿地が失われ、姿を
消した野鳥がいることも忘れてはいけない。

さて、池ができると魚が増える。開園当初はモツ
ゴなど小さな魚が多かったのだろう、小魚を餌とす
るカイツブリが増えたが、ブラックバスなどが放た
れると小魚は減り、カイツブリは減少していった。
ブラックバスは食欲旺盛な特定外来生物である。



ブラックバスを呑み込むカワウ 2022.1.15 千駄堀池

千駄堀池の生態系の頂点にいるのは、ブラックバ
スだろうか。いや、ブラックバスの上にはカワウが
いる。鳥類は歯が無いから、まさに鵜呑み。ただし、
これだけの大物だと、呑み込むのも大変。魚の眼に
嘴を刺すなどして弱らせ、何回も啜えなおして、頭
から呑み込む。時には、呑み込むことができずに諦
めることもある。ちなみに“鵜飼”に使われるの
は、カワウではなく近縁のウミウである。

千駄堀池には、ブラックバスのほかにもいろんな
魚がいる。カワウが特定外来生物だけを選んで食
べてくれるといいのだが、そうはいかない。千葉県
のレッドリストでは Bランク(重要保護生物)の、ギン
ブナを捕食していることもある。

(山田純稔)

★松戸のみどり再発見ツアー58 ★新型コロナウィルス関連で中止になる場合がございます。事前にご確認を！

「市ざかいに残る豊かな自然をたずねる」 (申込先着 20 名・4 月 1 日受付開始)

松戸市との市ざかい、市川北部に残された自然、消えていく森を訪ね、みどりについて考える。
森の中でじっくりと樹木・野草・森の生き物たちと向き合い、身近なみどりを楽しみましょう。

4 月 14 日(木) 9:30~12:30 (小雨実施) 参加費 300 円 (会員は 100 円)

集合 9:30: 北総線大町駅 持ち物 飲み物、雨具、マスク、手指消毒剤。山道を歩きます。歩きやすい服装で。

申込み・問合せ: 090-4078-3703 (藤田 18 時以降)